

卓 話

●三渡圭介会員

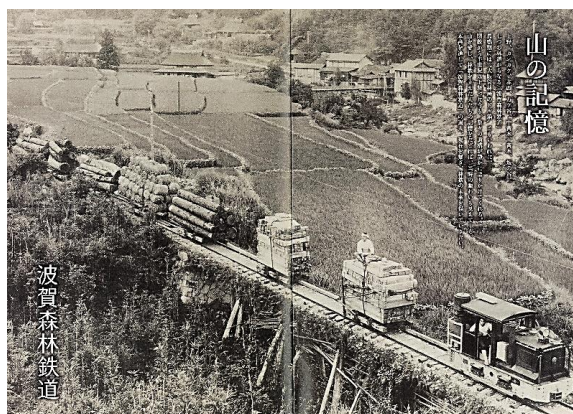
「宍粟の林業と森林鉄道」



大正 12 年の宍粟郡誌と云う資料があります。今から数えると 99 年前の記念誌であります。それを見ますと人口が 60443 人で所帯数は 10862 戸あり、一戸当たり 5.56 人の家族が有ったそうです。大きな企業もなし、大手企業があったわけでもない時代にこれだけの人口をこの地域で経済的に成り立っていたことは、現在から見ますと大変不思議に思えます。

基本は農業をベースにして田植えが済むと、山裾や空き地に植えた桑の葉を摘み蚕を飼い繭になるまで育てます。その繭を出荷すると稲刈りが始まり、米の収穫が終わると、山に入り薪づくりや炭を焼く仕事に代わります。その仕事に携わる人々は養蚕組合に加盟していて、その数は 2700 戸あり家族を中心に行っておりましたが、それだけでは人手が足りません、それぞれ手伝いを求められその数は 1500 人の人がおられ合わせて 4000 戸あまりの人が従事されていたと推察します。また秋から冬にかけて山に入り薪づくり、炭焼きに携わる人は組合加盟が 2000 人程で養蚕と同じく手伝いをされる人を合わせて 3000 軒余りが従事されていたと推察します。養蚕業と薪炭業を合わせると 7000 戸余りになる訳ですが、この二つの産業は重複しており季節を分けて春農業と、夏にかけて養蚕、秋に農業そして冬にかけて薪炭製造と、一年を季節ごとにうまく分けて生産活動に使っておられました。

ちょうどその頃、宍粟郡には豊かな天然林があり、それに目を付けた国は大正 4 年ごろから北部の天然林を伐採し、市場に出す事を考え運搬に道路のない山間部において鉄道を設置しました、それが「波賀森林鉄道」です。昭和の 40 年頃まで続き最盛期には営林署のみで 150 人ぐらいの雇用を生み、戦中戦後の宍粟郡の経済を支えておりました。



特に、宍粟郡の林業は戦後京阪神の市場に近く、戦後復興の資材に重宝され建設の仮設資材や、一升瓶を入れる箱、商品を保護する梱包材等、あらゆる産業に使われ、醸造産業には樽や桶にも多く使われました。もちろん一次産業においても経済復興により流通が盛んになると農業、漁業においても商品を入れる箱が大いに足らなくなり、郡内の製材所はその必要性から多くの製材所が雨後の筍のように増えました。その上、産業が復興するにつけ電信電話の需要が増えると電信柱の需要が多くなり山は忙しくなっておりました。

昭和 34 年の宍粟郡の木材協同組合のその数は製材所 89 事業所と素材の事業者 152 人が加盟し

ており、現在のその数は名前だけの方を入れても激減しております。その原因は電信柱がコンクリートパイプに代わったように、石油化学の発達により樹脂、発泡スチロール、ステンレス、段ボールなどの木材に代わる素材が開発され、木材利用が一挙に廃れてしまいました。

その上、昭和46年のドルショック、オイルショック、昭和60年のプラザ合意によって為替レートが大きく変わり、外国産木材が大量に入ってくるようになり、この地域のみならず国産材は大きな打撃を受けました

現在の木材利用は大きく分けて建築材、製紙用のチップ、そしてバイオマス発電用のチップに使用されていますが、日本の自給率は平成15年当時には18%で、現在は石油・石炭の代替えに木材を燃やして発電する事を含めても、やっと36%で今も64%を外国から買っております。

緑豊かなこの日本において国産材をもっと使用しなくてはならないと考えます。ただ、昔のようにあらゆる産業で使われる事はなく、建築業に特化されており、その為には山の手入れが必要で10年ごとの間伐に枝打ちをかけないと建築業界では使ってもらえません。戦後復興の時の様な市場に近い立地で製材をすれば何でも売れる事にはなりません。高速道路に象徴されるようにインフラ整備が施され、産地から市場は時間的にも短くなってきており、良い産地が評価され、それ以外の産地は淘汰される時代になりました。その上、林業の集材作業も一変し、高性能機械による造材により若い人の林業への見方も変わって来ております。

それに商品の売り方も変わり、バリューチェーンのように商品を製造・販売して行く仕組みが一体化するシステムがどの業界においても進んでおります。私はロータリーの職業奉仕として、この宍粟市での地域業界においても原木造材、製材、加工、建築が一体化する仕組みが必要と考えます。

現在林業で使う高性能機械の一部



ハーベスタ



プロセッサ



フォワーダ



スイングヤルダー